



中田遺跡復元住宅

中田遺跡は中野山王町三町目に位置する、三万八千²mにも及ぶ大規模な遺跡（八王子市No. 92遺跡）です。

川口川のほとりの微高地に位置し、旧石器・縄文・弥生・古墳時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・戦国時代・江戸時代にかけての複合遺跡。昭和四十一年・四十二年に都営中野町アパートの建設に先立ち、約三万²mが調査され、当時としては画期的な大規模調査が実施された。特に古墳時代から奈良・平安時代にかけての先駆けとなる調査と研究が行われたことで、研究史的にも高い評価を受けている。

◇散歩のみどころ

元本郷の市役所から出発、中野上町、谷野町を経て中野町に戻る凡そ六kmの行程。市役所内の郷土讃画レリーフ、桜の標準木を見学。近くにある旧元本郷浄水所(都の水道局)を見学した後、浅川をつるまきを見て、萩原橋へ。川を渡り織物工場のノコギリ屋根や水車が多くあつた清水川を見た後、秋川街道に出る。旧片倉製糸蚕室、競馬場跡、テト馬車道を見ながら旧道を通り山田の森へ。川口川に出て、古墳時代の中田遺跡と代官淵を見て中野山王に入る。困民党の碑や湧水の子安神社を経て、谷野町へと向かう。北村透谷の文学碑、さらに困民党指導者須長漣蔵の墓を見る。そこから市道を南へと歩き、工学院大学や少年鑑別所などの建物を見ながらおしゃもじ様を参拝。中野市民センターで解散。



八王子の郷土をモチーフにしたレリーフ

「八王子市郷土讃画」 橋本豊治 作

八王子市郷土讃画説明

- ① 北條氏照公と滝山の桜
- ② 織物の街の象徴
糸車と市の木イチヨウ模様の織物
- ③ 四谷の獅子舞と八王子徽章
- ④ 車人形「二人三番叟」
- ⑤ 千人同心
- ⑥ 農業の象徴 稲
- ⑦ 市の花 山ゆり
- ⑧ 高尾山と山伏・天狗

①八王子市役所

●変遷

- ・明治二十一年（一八八八）四月
八王子町制施行により誕生。市の前身。その後、町役場は元横山町に置く。
- ・明治二十四年（一八九一）五月
八日町に移転。
- ・明治三十年（一八九七）四月
明治大火により焼失。四月元本郷の善能寺に仮役場を置き、のち小門町へ移転。
- ・明治三十二年（一八九九）四月
小門町の役場が焼失したため、本町に仮役場を開設。
- ・明治三十三年（一九〇〇）五月
元横山町の旧一府九県連合共進会本館の建物に移転。
- ・明治三十五年（一九〇二）三月
元横山町三九二番地の元役場への移転を申請。同年四月四日認可。
- ・明治四十三年（一九一〇）三月

八幡町の元七十八銀行に移転。
・大正六年（一九一七）九月
八王子市制施行により町役場から市役所に改称。

・昭和五年（一九三〇）六月
天神町市立第四尋常小学校旧校舎に移転。

・昭和十二年（一九三七）十月
天神町新庁舎落成十一月一日事務開始。

・昭和二十年（一九四五）八月
太平洋戦争八王子空襲により新築後八年で焼失。翌三日小宮出張所に仮庁舎を開設。その後、市立第一小学校講堂に仮移転。

・昭和二十六年（一九五一）三月
本町十五番地に新庁舎を開設。
・昭和五十八年（一九八三）九月
元本郷町三―二四―一に新庁舎が落成した。同年十月三日業務を開始。



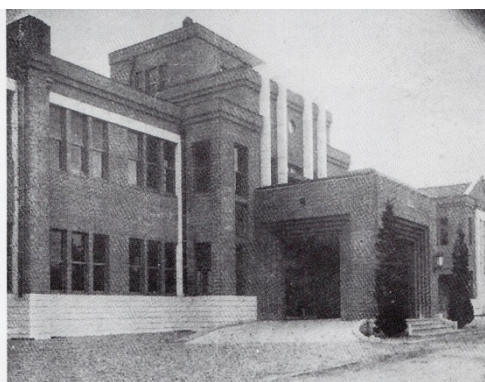
八王子市
章 徽



庁舎前の「平和な朝」像



現在の八王子市役所



八王子市役所（天神町）昭和12年



八王子市役所大正15年
「市制十周年記念 八王子」



大正15年の八王子市街風景

● 八王子天気相談所

昭和五十八年（一九八三）十月三日開設。日立市に次いで全国で二番目の市独自の天気相談所。初代所長は原嶋宏昌氏。昭和三十二年以降続けられてきた市立第四中学校気象観測業務が、同四十三年に気象庁東京管区気象台八王子地域観測所に指定された。公的気象データの観測を行ってきたものを、八王子市が引き継ぎ、同五十七年四月八王子市気象観測室として設置。それを拡充して天気相談所としたもので、気象観測をはじめ、予報、電話による気象情報の提供などのサービスを行っている。



お天気相談所内部

●八王子の標準木

八王子の桜の標準木は市役所北側、浅川の土手沿いに植えられている。鶴巻橋側から数えて四本目の木である。以前は、第四中学校の桜の木を標準木として昭和三十三年三月二十九日から観察していたが、新庁舎完成と共に昭和五十八年十月一日から「お天気相談所」で観察を続けている。土手沿いにある新木の性質に近い木を決め、このソメイヨシノの桜の木になったという。かつて、八王子で全国トップに開花宣言をしたのは、平成十四年三月十五日。一番遅い開花日は、昭和五十九年四月十四日という。



さくらの開花を決める標準木

②元本郷浄水場

元八王子町三―十九―一

八王子市公共上水道給水開始の最初の給水施設。市が元本郷浄水場として、昭和四年（一九二九）三月三十一日完成。前年九月一日給水開始。開設時の規模は敷地面積七千五百七坪、取水ソク筒七馬力半三台、送水ソク筒五十馬力三台、濾過池三池一千六百六十㎡、横山散田配水場への送水管路一四七〇・九六m、送水管口径三五〇mm、延長一七九一m、



さくらの標準木

総工事費九十六万三千二百八十一円、給水対象人口六万人であった。同時に散田配水場（通称・水道山）も建設された。

昭和二十六年第二期拡張工事として明神町浄水場、同三十三年第三期工事として中野町浄水場が建設され、次いで第四次拡張工事として元本郷浄水場の水源増強工事も行われた。

昭和五十一年（一九七六）二月市から東京都に移管、平成二年（一九九〇）四月に現在名に改称された。

現在、取水送水の水源は、八王子市内を流れる浅川を直接利用し、不足分は多摩川や利根川からの水を用いている。東村山貯水池を通り八王子市内まで送られている。

市内の浄水場、給水所は、一番早く造られた散田給水所（水道山）を初め十八カ所設置され、送水も行なわれている。都立陵南公園にある給水槽は、震災対策用応急給水として利用されるという。東村山貯水池から送られた水は、八王子市内に来るまで十時間かかるということである。



昭和初期の浄水場空撮



元本郷浄水場全景



元本郷二号水源



竣工当時のポンプ棟



旧給水施設の内部



元本郷三号水源

●元本郷浄水所の水神祠

八王子市初の水道浄水場が元本郷に完成し、その浄水の守護神として、八王子市長武藤文吾らが中心になり、浄水場完成時に創建したもの。当初西北隅に鎮座していたが、多賀公園建設に伴い正門右側に移転した。



浄水場の水神祠



記念碑

●つるまき（鶴巻）

南北浅川と城山川の合流点近くの中州一帯に大きな淵が出来た。その付近の通称名。なめ（粘土）の川床がツルツルと滑るのでこの呼称が出来たという説がある。また、弓道で使う「弦巻」からとの説。他には、鳥の「鶴」に「巻」を付けたからの説もあるが、いずれも確証はなく、判然としない。

北浅川の水源は、陣馬山付近の山麓で、南浅川より距離があり水量も多いが流れが南浅川に比べると緩やかになる。また、南浅川の水源は高尾山麓で、距離はなく水量も普段は少ないが、大雨が降ると急流と化す。強い流れは弱い流れを包み、そこに時計回りの渦ができ、石と共に粘土状の地層をめぐり大きな淵となる。これが「つるまき」ではと専門家はいう。しかし昔は鶴が飛来したという話も聞く。



南浅川と北浅川の合流地点



北浅川と南浅川と城山川の合流地点

● 鶴巻橋

浅川に架かる橋。元本郷三丁目と中野上町四丁目を結ぶ、長さ百六十m、幅十四・二mのコンクリート橋。八王子市庁舎の建設に伴い昭和六十一年（一九八六）三月架設、開通した。

八王子の歴史にかかわるテーマのブロンズ像八体が設置されている。橋の名は市民からの公募により名づけられた。また、平安時代中期、現在の八王子西部に朝廷直轄の牧場である「由比の牧」があったと言う。



千人同心像



松 姫 像



夕焼け小焼けの像



由比の牧の像



鶴舞の像

③ 萩原彦七と萩原橋

中野上町・平岡町

市街地を起点に北西にのびる秋川街道が浅川を渡る際の萩原橋は、明治三十三年（一九〇〇）「武州の製糸王」と呼ばれた萩原彦七らが私財を投じて建設した。

彦七は明治九年（一八七六）、多摩郡中野村に八王子初の機械製糸工場（現在の中野上町二丁目）を設立。当時、生糸は輸出品の花形だったが、その製造は手作業による座繰（ざぐり）製糸が主流であった。そのため、生産量が追いつかず乱造が進み、品質は著しく低下した。こうした中、彦七はいち早く水車の動力を利用した機械製糸工場を設立し、生糸の品質と生産力の向上を図った。更にフランス人技術者を招いて設備を拡大。明治二十六年（一八九三）には全国第二位の生産高を誇るまでになった。こうして得た私財を投じて建設された萩原橋は、その後の織物産業の発

展を支えただけでなく、今も私達の生活道路として利用されている。

橋の南詰には彦七らの名前が刻まれた石碑と、欄干に施された絹織物にちなんだ飾りがある。萩原製糸工場は、明治期の恐慌が契機となり、同三十四年（一九〇二）片倉製糸（當時は片倉組）に買収された。



萩原彦七



糸車の飾り



糸を紡ぐ女の飾り



萩原橋全景

●萩原橋の碑

碑の正面には萩原橋の概要と寄付をした建設協賛者二百五十名の氏名が刻まれている。しかし協賛者から集めた寄付金が一部の人によって使い込まれたため、工費の殆どを萩原彦七が負担したという。

金銭にからむ汚れた話は何時の時代でも繰り返されるようだ。その一部の人達の名が碑の中に未だに美談として刻み込まれている。

萩原彦七の晩年は哀れであった。無一文で神奈川県庁に資金補助を願うが相手にされず、気が触れていると勘違いされ施設に収容されたこともあるという。また生家の室に閉じ込められ錯乱状態になったとも聞く。資本主義という大きな化物の渦に吞まれていった一人なのか。昭和四年一月四日夜、波乱の生涯を閉じた。墓は上野町の金剛院にある。



萩原彦七の墓



(裏) 萩原橋の碑



(表)

●「中野」町の成立

室町時代初め戸倉城（現あきる野市）に拠った小宮上野介憲顕の所領は秋川流域・八王子北部の五十九ヶ村に及び「中野」もその中に含まれていた。「中」は地域の中心の意で、「野」は少し開けた所を表し、「中野村」と称していた。

時代は下って、明治十二年「西中野村」と称するようになったが、その後、周辺六ヶ村とともに「七村連合村」となった。

明治二十一年四月市町村制の公布により、神奈川県南多摩郡小宮村に改め、中野村は西中野の大字を使用。同二十六年四月東京府に移管された昭和十年一月に「小宮町」とし、同十六年十月八王子市と合併し、後「八王子市中野町」となった。

近年住居表示実施により分町。暁町、中野上町、中野山王町・中野町の四町となった。

④ノコギリ屋根のある町

八王子市内には戦前戦後を通じノコギリ形三角屋根のある織物工場が沢山見受けられた。なかでも中野上町の大竹絹織物株式会社は、市内大手の織物工場として有名であった。

この工場は、江戸時代の嘉永六年（一八五三）創業された。昭和二十五年（一九五〇）に株式会社に変更され、呉服地を主に織っていた。しかし昭和三十年頃から科学繊維の普及で呉服地の需要が減少し、カーテン地やストールが主力製品となっていった。特に紋織りの複雑な柄に定評があり、ゴブラン織風の美術織物も手がけていた。昭和三十年代頃までは、集団就職などの女子工員（織工）が大勢寮で暮らしていたという。しかし平成二十三年頃には、七棟が連なったノコギリ屋根の工場も無くなっていった。現在、ノコギリ屋根は、元八王子の一部と万町のリヨン工場などに残るのみとなった。



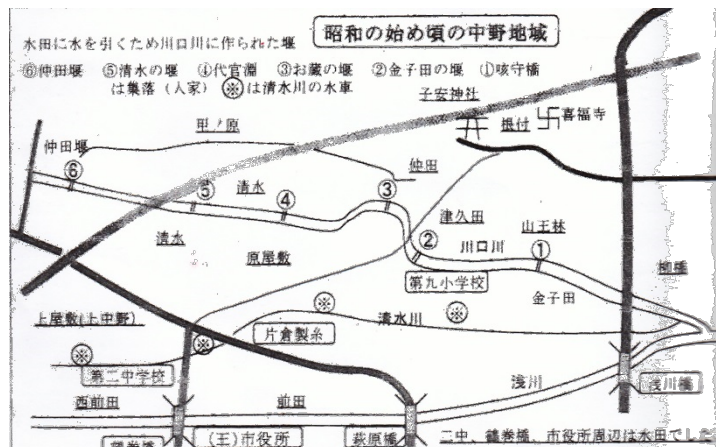
大竹絹織のノコギリ屋根



水車の跡が残る青木宅の小川

⑤ 水車の面影残す清水川

中野上町を流れる清水川の源流は定かではない。古老の話では、檜原町の檜原給水所辺りが水源ではないかという。この清水川には精米用の水車が何カ所もあり、戦後まで残っていたという。今でも、青木宅の庭を流れる小川には水車の跡が残る。飲料水になりそうな清水が流れている。この川は、川口川に注いでいる。



昭和の初めころの中野地域

⑥旧片倉製糸蚕室

中野上町二・十九・十六

萩原橋から北西に約六百m行くと、秋川街道沿いに木造二階建ての大きな建物二棟が目につく。これは昭和十二年（一九三七）片倉製糸がカイコを飼育するために建てた蚕室である。大きさは間口九m奥行二十五m、屋根には蚕室特有の窓がある。

片倉製糸は明治六年（一八七三）、長野県諏訪郡川岸村（現、岡谷市）で片倉市助が製糸業を創業。生糸の輸出ブームにのり日本最大の製糸会社に成長した。明治三十四年（一九〇一）萩原製糸工場を買収し八王子製糸場を操業した。八王子周辺の農村からは繭が続々とこの製糸場に集められ、養蚕、製糸、織物産業の発展に大きく貢献し「桑都八王子」の名を高めた。

昭和十八年（一九四三）に片倉工業株式会社と改称。同年、消防ポンプ車製造の日本機械工業株式会社

（片倉系）が製糸工場の敷地内に工場を開設した。戦後、製糸工場は八王子から撤退した。

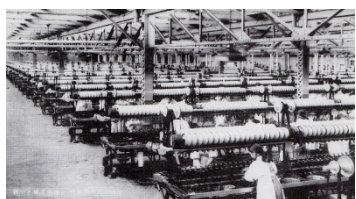
日本機械の事務所棟は旧片倉製糸時代のもの。かつての蚕室は倉庫と寮、工場は部品倉庫となったが、当時の面影を今に残している。敷地内の池は清水川の水を取り入れている。



旧片倉製糸蚕室



旧片倉製糸蚕室



繰糸工場の一部



旧片倉製糸蚕室

⑦中野町の競馬場

中野上町二丁目

競馬が日本で始まったのは文久二年（一八六二）、横浜の外国人居留地といわれている。明治時代には富国強兵政策で軍馬育成が奨励されていた。

八王子では、大正時代後半に小宮村中野（現、中野町付近）の神社祭礼の余興だった「お祭り競馬」が始まりといわれている。

昭和三年（一九二八）には、現在の中野上町付近に一周千m、幅十六mの競馬場を建設。ここで行われていた八王子競馬は大盛況で、すぐに手狭となり、昭和九年（一九三四）には一周千六百m、幅三十mの「八王子多摩競馬場」が現在の高倉町に新設された。しかし、戦争の足音が聞こえ始めた昭和十四年（一九三九）に、競馬は中止。「鍛錬馬場」として利用された。

中野の競馬場の敷地は、日本機械

工業の正門前の道より南に入り、浅川土手を南詰として西側は市立二中あたりまでで、秋川街道沿いの野口染物店南にメインスタンドがあった。同店では競馬関係者に宿を提供、自宅敷地東側に馬頭観音を祀っていたが、高倉町移転とともに観音も同地に移した。

また、競馬開催時には入場券、投票券等の発券を、地元婦人会が手伝ったといわれている。



競馬場跡（前方は鶴巻橋）

⑧秋川街道「テト馬車」道

明治三十四年頃五日市村の石川重兵衛は、川口村今熊山下から八王子町本郷横町の立場まで乗合馬車を始めた。六人乗りの一頭立て馬車で、馭者と別当が付き、別当が「テトーテトー」とラッパを吹き鳴らすところから「テト馬車」と呼ばれた。

運行は、特に決まったダイヤもなく、乗客が数人集まれば発車し、停車場などでも無かった。何処でも降り出るといふようなんびりしたものだった。荷物の運搬を頼むのも、旗を立てておけば通りすがりに取って行ってくれたという。

地元古老の話では、旧料亭「志村屋」のところに馬車置き場があり、馬の水飲み場があった。また、馭者が眠っていても、馬がちゃんと終点まで車を引いて行ったという。

大正十年（一九二一）小峰トンネルが開通した。「テト馬車」は、トンネル開通により、重兵衛の子虎一郎

が八王子から五日市間に乗合自動車を走らせたため廃止された。



左：現 秋川街道 右：旧 秋川街道

⑨ 山田の森

中野上町三十一・一

中野地区の川口川と浅川との間の小高い一帯は「原」と呼ばれ、農家の屋敷が点在していた。その一軒に当たる山田家の屋敷が今に残っている。通称「山田の森」と呼ばれるとおりケヤキの大木に囲まれた大きな屋敷である。

山田家の二代ほど前の当主は、バレーボール全日本女子監督の山田重雄氏である。同氏は昭和六年（一九三一）静岡県に生まれ、東京教育大（現つくば大）を卒業後、昭和四十年（一九六五）日立武蔵チームを創設した。八王子出身の生沼スミエを入部させ、昭和四十二年（一九六七）日立を中心とした全日本チームにより世界選手権大会で優勝。メキシコ、ミュンヘンの両オリンピックに出場、大松監督に次ぐ山田時代を築いた。大林素子（八王子実践卒）も育てている。自宅に女子中学生を寄宿させ、

市立二中に通わせ、八王子実践高を経由して日立武蔵に入社させるという有力選手育成システムを作り出した人である。



山田家の屋敷門

⑩中田遺跡（古墳時代のムラ）

中野山王三、十二

「川口川北岸の都営中野団地の一角に古墳時代に栄えたムラがあった。八王子市指定の中田遺跡である。昭和四十一年（一九六六）十一月、団地の建設に先立って発掘調査が行われ、発掘地区は約三万²mにも及んだ。その結果、旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、鎌倉、室町、戦国江戸時代にかけての複合遺跡であることが判明した。なかでも縄文時代中期から平安時代に至る住居跡を百四十二軒発見。関東でも最大規模の遺跡として注目を集めた。」

住居跡の約五十%が古墳時代のもの。その多くが大型で、当時の栄華がしのばれる。遺跡は古墳時代から奈良、平安時代へと続くムラの変遷が良く分かる貴重なものである。また同時に、生活内容を示す多量の土器とともに鋤、鍬、鎌などの農具、糸を紡ぐのに使った紡錘車（ぼうす

いしや）や刀子（とうす）などの鉄製品も多数出土。さらに炭化米は、広範囲な農耕集落の形成を物語る。その代表例として、住居一棟を復元、三軒の住居跡を遺跡公園に整備して一般公開している。主な出土品は、郷土資料館に常設展示されている。

●尖頭器

旧石器時代の遺物。黒曜石製尖頭器は、中田遺跡では初めてである。



旧石器時代の黒曜石製尖頭器

●集石遺構

縄文時代中期の集積遺構は三カ所見つかった。この遺構から、蒸き調理が行われたと推測できる。



縄文中期の集石遺構



中田遺跡復元住宅



中田遺跡空中写真



中田遺跡の位置

⑪代官淵

中野山王三丁目

代官淵は、川口川の中流、中野山王三丁目市立清水小の南側にあった。かつて川口川は、この代官淵のあたりで大きく蛇行していた。大きな淵をつくっていた。

名の由来は、甲斐の人、大久保長安は、兄とともに、武田信玄により武士に取り立てられ貢税や司法、鉾山採掘など民政に従事した。武田家滅亡後、徳川家康に召抱えられた。

八王子小門宿に陣屋を設け、八王子宿を開き支配し、十八代官と千人同心を統括した。治水や灌漑、伝馬制を定め、検地も行った。石見銀山奉行、佐渡奉行、伊豆代官となり金銀

の生産を倍増させた。江戸城拡張期には八王子石灰を漆喰用に供出した。晩年は、数々の不正が発覚し、家康

により失脚させられたといわれ、遺子七名死罪、財産没収が行われた。

遺子の処刑が、川口川の淵近くで

行われ、後年、刑場あたりを「代官淵」と呼ぶようになったといわれている。

地元の古老の話では、夏の台風シーズンには何度も代官淵が決壊し、大水に悩まされた記憶がよみがえる所だと言っていた。現在は住宅地となっている。

また別の説では、中野地区には原屋敷、根付屋敷、上屋敷などの小字名があり、昔、代官村田四郎兵衛の屋敷があったのでこの名が付いたという。

代官淵は清水小学校あたりで、以前は子供の水浴びの場所であった。淵の深さは四・五m、長さ四十m程で男の子向きだったという。

昭和の初め頃まで、お盆の時に泳ぐと代官さまに川へ引き込まれるといわれたという。



埋立地後の下水溝



中野の代官淵跡 昭和45年頃



子安神社

⑫子安神社（明神様）

中野山王二一二十三—一

祭神 木花開耶姫命

例祭 八月第三日曜日

創建 不詳

旧村社。一説には北条氏照が子孫繁栄のため創建したとも伝えられている。境内の神泉は安産子育ての霊水として崇敬されている。

現在の社殿は昭和三十三年（一九五八）に再建、商業の祖神を相殿に奉斎、境内社の久須志神社は医薬の神様として知られている。

●困民党碑（子安神社）

明治十七年（一八八四）九月この地に起きた困民党事件で、子安神社に結集した塩野倉之助、小池吉教と多くの農民らを顕彰せんと、昭和六十年一月沼謙吉氏により建てられた。



困民党之碑(子安神社境内)



子安神社の湧水

● 困民党首領の碑

この地で起きた困民党事件で逮捕抑留された首領の塩野倉之助と多くの農民の為に、昭和二十九年（一九五四）犬目町の安養寺に建てられた。明治十四年（一八八一）以降の松方デフレ政策の影響を受け、主に開港後に養蚕、製糸等が急速に発達した地方は深刻な不況に陥った。困民党とは、そうした地方の農民が負債利子減免、元金年賦償却等を要求する中で、持続的に運動を展開するために結成した組織である。



困民党首領塩野倉之助之の碑

⑬ 持田治郎と多摩病院

中野町二〇八二

明治三十四年（一九〇一）五月二十日生れ。埼玉県深谷市出身。日本医大卒。医療法人財団緑雲会多摩病院院長。多摩文化研究会をバックアップし、八王子・多摩地域の歴史文化の振興に大きく貢献した。

昭和五十九年（一九八四）二月二十三日没の妻ツネは、明治の侠客「関東綱五郎」の孫にあたる。（散歩資料五十二号参照）

● 医療法人緑雲会多摩病院

昭和十三年一月持田治郎氏が当地に、多摩病院（精神・神経科）を開設。病床数二十八床。昭和二十六年一月医療法人財団緑雲会設立。平成六年一月 老人保健施設「ハynes憩いの丘」開設。同十年一月、在宅介護地域包括センター中野開設。三月、精神障害者社会復帰施設福祉ホーム「多摩ハイツ」開設。平成十五年四

月 知的障害者入所更生施設「愛幸」開設。



多摩病院
（老人保健施設ハynes憩いの丘）

⑭ 北村透谷文学碑

みつい台二丁目谷野西公園内

「内部生命の碑」昭和三十二年（一九五七）十月二十六日除幕。碑には『造化は人間を支配す 然れども人間も亦 造化を支配す』と刻まれている。

ふだん記運動の創設者として知られる橋本義夫氏らが、透谷没後六十

年の昭和二十九年（一九五四）、透谷が愛した上川口に幻境の碑を建立しようとした。しかし周囲に反対され、昭和三十二年（一九五七）に建立地を中野町に変更した。しかしまたも、幻境でもない中野町に碑を建てることに反対された。除幕式の数日前に碑面を削り「内部生命の碑」とし、ようやく除幕式を行うことができた。ところが昭和四十五年（一九七〇）前後にみつい団地の造成が始まり、再び団地内の谷野西公園に昭和五十二年（一九七七）に移された。彷徨の碑といわれている。



北村透谷の碑

⑮ 須長漣蔵の墓所

嘉永五年（一八五二）から昭和十五年（一九四〇）十月十九日。困民党指導者。多摩郡谷野村の豪農の長男として生れた。慶応三年（一八六七）組頭、明治五年（一八七二）谷野村戸長、同十年留所学校周旋掛、同十二年連合村戸長、同十五年学務委員兼務、その後負債を抱え、同十七年戸長辞任、困民党指導者となる。明治十八年一月神奈川県令と交渉中に困民党は破壊され、投獄される。同年夏出獄、行商人として全国を放浪。明治二十三年自由党员成内頼一



北村透谷とミナ(美那子)

郎及び鈴木芳良の小作人となる。温厚な人柄ながら、内には強い意志を持っていた。谷野町にある墓は墓石ではなく、僅かに自然石一つ置いただけの墓である。この近くには持田治郎の建てた顕彰碑がある。



須長漣蔵の墓



持田治郎建立の顕彰碑

⑩ 東京婦人補導院

中野町二七二六

昭和三十三年（一九五八）五月一日法務省設置法の改正により設置。同六十年二月府中市より当地に移され開所。全国各所のうちの一つで、補導処分に付された者を収容補導し、生活指導、職業指導などを行い、社会復帰を図るのが目的である。

● 八王子少年鑑別所

昭和五十八年（一九八三）四月、東京婦人補導院内に、都内で二番目の少年鑑別所として開所。十四歳以

上二十歳未満の犯罪に手を染めた少年を対象に収容、定員八十名。

平成二年（一九九〇）支所より八王子少年鑑別所に昇格。一般青少年の相談所、多摩少年指導センターを併設している。

⑪ 甲の原のおしやもじ様

中野町二七三七

現在の中野町辺り（中央道の北側）は昔から甲の原と呼ばれている。一説には、天正十八年の八王子城攻めの際、豊臣方・前田利家の軍勢が此処でかぶとを着けたので、その名があるという。

この甲の原に小さなお稻荷さんがあり、「おしやもじ様」と呼ばれている。ちょうど東京婦人補導院・八王子少年鑑別所の真向かい。このおしやもじ様は、ご利益のあるお稻荷さんとして知られてきた。土地の古老の話によると、

「私が子供の頃、家族が風邪で寝込んだりすると、よく母親に、おしやもじ様に行つて、おしやもじを借りてきてと、いわれたものです。おしやもじ様の前には、おしやもじが山のように積まれていて、その中から綺麗なものを選んで持ってきました。そして、そのしやもじでご飯を盛つて食べると、病気が治るといわれていました」とのこと。ご利益を受けた時には、借りたしやもじとともに、新しいものをお供えするそうだ。

堂守の木下文夫さんの話では「しやもじを供えるのは、稲荷Ⅱ稲Ⅱ米Ⅱご飯の連想からでしょう。私は建築業をしています、開業したてで仕事が無い時にお参りしたら、三件ほど続けてありました。どの注文主の家にも、お稻荷さんがあったので、きっと、おしやもじ様のご利益だったのでしょう。お稻荷さんの隣に住んでいますから、勿論、お参りは欠かせませんよ」と。

二月の初午が祭日で、五色ののぼ

りが供えられる。
祠に向かつて右に、石作りの小さなお宮が置いてあり、それに、「榊稻荷大明神」と「安政三年奉」の字が読み取れる。現在の建物は、東京婦人補導院開設時に、建てられたものである。



甲の原のおしゃもじ様

◎参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・江戸名所図絵
- ・武蔵名勝図絵
- ・八王子の歴史と文化
- ・セピア色の風景
- ・八王子事典
- ・八王子市史
- ・八王子広報
- ・歴史と浪漫の散歩道
- ・多摩の百年(下) 絹の道
朝日新聞社 角田秀雄著
- ・新八王子百景
- ・中田遺跡調査資料
- ・インターネット各ページ
- ・昭文社
- ・八王子観光マップ
- ・八王子市地図
- ・八王子市郷土資料館